



光る知性 豊かな心 強い意志

南 中 生

長井市立長井南中学校

令和 4 年 10 月 25 日

校長 赤間 幸生

77年前に思いを馳せる

平和へのメッセージ

10月23日（日）長井市戦没者追悼式が長井市民文化会館で行われました。本校より3年生 鈴木絵理さんが参列し「平和へのメッセージ」を堂々と発表しました。絵理さんの話に大きく頷く方、思わず拍手をなさる方、戦争を知らない中学生ではあるものの、平和への思いや願いは共感を呼んでいました。



8月6日と9日が何の日か、答えられない人が増えているそうです。長崎市に住む89歳の男性は、小学6年生の時に爆心地から1.2km地点で被爆し、同じ小学校に通っていた約1500人の児童のうち、1400人余りが犠牲になったとのこと。その男性はいわれなき差別や偏見と戦いながら「あの日」の記憶を語り続けていました。「長崎を忘れることは“生命の魔性”を忘れること。私の戦いは終わりません。」と。

今や日本人の8割以上が戦後生まれ。被爆者の平均年齢は85歳を超えました。平和とは忘却との戦い。今を生きる中学生として、その親として、77年前に思いを馳せ、改めて戦争と向き合い、平和について希求する時を共に持ちたいものです。



「明るい未来を求めて」 3年 鈴木 絵理 さん

空を覆った一瞬の光。1945年8月6日午前8時15分。広島運命が決まったあの日。また、3日後の長崎でも同じことが起こりました。現在、あの頃の戦争の映像を見て、見たくないと思う人がいる一方で、遠い昔歴史上の出来事だと終わる人も多いのではないでしょうか。

今年の2月、ロシア軍がウクライナ侵攻を始めたというニュースを見た時、私はその光景に目を奪われました。そこには、煙が上がる街の中を泣きながら一人歩く男の子がいたのです。その少年を見た時、最初に感じたのは怒りでした。なぜこんな幼い子供までが、悲しい思いや辛い思いをしなければならないのだろうか。胸が締め付けられました。

そして迎えた8月、広島と長崎を一瞬にして焼き尽くした原子爆弾が、今なお世界には約1万3千個もあり、わずか3個の核で人口10万人の都市がなくなってしまうことを知りました。私達は常に危険と隣り合わせだったことに気づき、背筋が凍りつきました。これまで、世界で核が落とされた国は日本だけです。世界唯一の被爆国として、核が使われる恐ろしさをもっと世界に広めていくべきだと思います。そのためには、まず私達が当時のことを知らなければなりません。

そう感じた私は、戦争を体験した祖母に話を聞きました。食べ物が少なかったため、四角に切った生の大根を米に足し量を増やして食べたこと、赤紙が来ると一般の人でも「お国のために」と人を殺しに行かなければならなかったことを話してくれました。さらに、一番怖かった事についても教えてくれました。「学校は、杉の木の下で勉強をしていてね、アメリカの飛行機が来たことを知らせるサイレンが鳴ると林の中へ逃げるんだ。それから、みんなで小さくなってその音が鳴り止むのを待つ。飛行機は屋根ぎりぎりを飛ぶから来るたび怖くてたまらなかったよ。」初めて祖母から聞いた話は、恐ろしく苦しいものばかりで、他人事のように感じていた「戦争」を、初めて身近に感じました。

祖母からの話を聞き、戦争の恐ろしさや二度と起こしてはいけないという強い思いが沸き起こり、自分事と捉えることができました。今この瞬間にも、私の知らない世界のどこかで戦争が起き、眠れない日々を送っている人がいるかもしれません。学校で勉強をしたり家族と食事を囲んだり、そんな日常がどれだけ幸せなのか。それは、当たり前のことではないということを感じて、生活していかなければならないと思います。

いつか誰もが平和な日常を過ごせる日がくることを祈り、全ての国の全ての人に笑顔という名の花が咲き誇ることを私は望みます。

未来は誰にも分らない。だからこそ、未来は楽しみにあふれているのです。その



未来を守るために、「戦争」という過去の教訓をしっかり受け止め、私達は未来を歩んでいかなければいけません。77年前、人々は手に兵器を持っていましたが、これからの未来では、手と手をつなぎ、みんなで握手できる優しい心を持ち続けていくことを願っています。いつまでもみんなの心が、光で溢れますように。